「美女と野獣」考 —その1—

新倉朗子

On "Beauty and the Beast"

Akiko Niikura

〔内容抄録〕 十七世紀末に流行をみた「仙女物語」Contes de fées の名残りの輝きともいうべき，十八世紀フランスの忘れられた作品，ヴィルヌーヴ夫人の「美女と野獣」について，流布されているボーモン夫人の再話と比べながら，筋の展開と表現上のちがいについて両者を考察し，それぞれの特質を明らかにしようとする試みである。

ふつう，「美女と野獣」といえばジャン・コクトー Jean Cocteau の映画を思い浮べる人が多いし，児童文学に興味のある人なら，ポール・アザール Paul Hazard の比較的寛大な評価を得た[1] ルプランス・ド・ボーモン夫人 Mme Leprince de Beaumont の童話を思い出すことだろう。ボーモン夫人の「美女と野獣」[2] は，英訳されたものが中学生向き副読本にとり入れられ，かなり早い時期から日本に知られていたし，翻訳による紹介もおこなわれている[3]。ここでとりあげようとするのは，ボーモン夫人の再話のもとでありながら，児童文学史でもあまり触れられることのない，もう一つの「美女と野獣」物語である。

フランス民話研究家ポール・ドラリュ Paul Delarue によれば，「子供の雑誌」 Magasin des Enfants (1757)に発表されたボーモン夫人の「美女と野獣」は，それより15年ほど前に書かれた，ヴィルヌーヴ夫人 Mme de Villeneuve[4] のもっと長い物語を要約したもので，後者のほうが，独創性においても，文体の面でもボーモン夫人の作に勝っており，よく知られるに値する，とある。

二つの物語の食い違う点

いま二つのテキストを並べてみると，第一にその長さが非常に違うことに気づく。100頁位の物語をボーモン夫人はざっと1/4位に縮めているのである。第二に，細かい点では，数に関する事柄が奇妙に食い違っている。例えば，商人の子供の数がヴィルヌーヴ夫人（以下Mme de V. とする）のは娘6人息子6人であるのに，ボーモン夫人（以下 Mme de B.)のは3人と3人であり，商人が破産して田舎に引きこもってから2年後（Mme de V.)／1年後（Mme de B.）に港に船が入ったという知らせが届き，町に行った商人は積荷のことで6ヶ月も努力した(Mme de V.)／非常に苦労した（Mme de B.)。野獣は娘を連れて1ヶ月以内に（Mme de V.)／3ヶ月以内に（Mme de B.）戻ってくるよう命じた。父の家に Belle が帰らせてもらう許しは2ヶ月（Mme de V.)／1週間（Mme de B.）の期限つきである。等々，他にも例を挙げるのは可能であるが，総じてヴィルヌーヴ夫人の物語のほうに数量的配慮が濃く，たんに「ぐっすり眠った」というかわりに，「夢は5時間続いた」とか，「3時間以上も探しまわった」とか，「4列に並んだ背の高いオレンヂの木」と

いうぐあいにきわめて具体的なイメージを描き出している。またBelle の年令も16才とはっきり指定されている。

筋の展開

ボーモン夫人の「美女と野獣」

第三に筋の運びについて両者を比べてみよう。まず，よく知られているボーモン夫人の再話によってまとめてみると，

金持の商人がいて娘が3人息子が3人いた。末娘は特に美しく，美女 Belle と呼ばれていたが，器量だけでなく気立ても非常にすぐれていた。突然商人が財産を失う破目になり一家は田舎の小さな家で暮すことになった。1年たった時失ったはずの船が荷を積んで港に入ったという報らせがくる。商人は子供たちにお土産を約束して旅立つのであるが Belle はただバラを1本だけ持ってきてくださいと頼む。町についた商人は積荷を自分のものにすることができず，来た時同様の貧乏なまま帰途につく。途中道に迷った彼はとある城に辿り着く。無人のその城で用意された御馳走を食べ，1晩明かした後帰ろうとして庭に出てバラの咲いているところを通り，Belle との約束を思い出してそれを摘みとる。と，突然おそろしい野獣 Bête が現われて命を助けるかわりに娘のうちの1人を連れて再び戻ってくるように，そうすれば大事なバラを盗んだ罪を許してやろう，という。商人は Bête に貰った金貨を箱一杯お土産に家に帰り，子供たちに一部始終を物語る。健気な Belle は，お父様の命を救えるなら，といって Bête の城に行くと申し出る。商人は Belle を連れて宮殿に戻る。その夜 Belle の夢に貴婦人が現われて，お前の孝行はきっと報われるでしょう，と告げる。翌日から宮殿における Belle の暮しが始まるが，家族に会えないことを除けば，何一つ不自由のない贅沢な暮しであった。ただ毎晩，夕食の時に Bête が現われて短い会話を交わした後，妻になってくれるかと尋ねるのが変った習慣であった。習慣になると Bête の醜さにも馴れて，彼の現れる9時になるのが待ち遠しかった。3ケ月が平和に過ぎた。Belle は鏡の中に病気の父が映っているのを見て，1週間だけ家に帰してほしいと頼み，その許しを得た。結婚した2人の姉はそれぞれ不幸で，いっそう美しくなった Belle をみて嫉妬にかられ，1週間の期限を延ばさせて Bête の怒りをかきたてようと企む。Belle は10日目の夜，宮殿の庭に横たわって死にかかっている Bête の夢をみ，自分の間違いに気づく。醜くて才智に乏しくても，心の優しさがそれを補うのではないか。姉たちの不幸をみても，女の幸福とは，美しく才気のある夫を持つことではなくて，性格のよい，親切な，徳のある夫を選ぶことではないか，Bête にはそれがすべて備わっている。私は彼を愛してはいないが尊敬と感謝と友情を抱いている——こう反省した Belle は宮殿に戻るため，教わった通りテーブルの上に指環を置いて眠る。夜の9時になっても Bête は姿を見せなかった。夢のことを思い出し，庭に出て探すと，運河のそばに倒れている Bête を見出す。お前が約束を忘れたので私は死のうとしている，と Bête はいう。「いいえ，いけません。あなたは死んではいけません。あなたは生きて私の夫になるのです。今この瞬間から私はあなたの妻になります。あなただけのものになると誓います。ああ，私はいままであなたに友情しか感じていないと思い込んでいました。でも私の味わった苦しみが，あなたなしで生きられないことを私に気づかせたのです。」[6] Belle のこの言葉が終わると，城には照明が輝やき，花火が上がり音楽が流れてお祝いがはじまる。ふり返ると Bête の姿はなくて，足許には Amour より美しい王子が魔法を解いてくれたお礼を述べていたのである。2人して宮殿に戻ると，父親や家族が待っているばかりか，夢の中に現われた仙女が，Belle に向ってこういうではないか——あなたは美しさや才気より徳を選ぶという正しい選択のごほうびを今受けとったのです。あなたは立派な女王になるでしょう，と。さらに彼女は，2人の姉に対し，意地悪な心を持ったまま石像になって妹の宮殿の入口に立ち，妹の幸福を眺め続けるという罰を受けるよう命じる。仙女の杖の一振りで一同は王子の国へ運ばれ，そこで Belle は末長く幸わせに暮した。

登場人物設定上の違い

1. 王　子

細かい点は別としてヴィルヌーヴ夫人の物語の場合，一番大きな違いは，Belle の夢の中に魅力あふれる王子が登場することである。最初の晩にはじめて夢に現われたその姿は，un jeune homme, beau comme on dépeint l'amour（愛の化身として描かれるような美しい青年）であり，彼は Belle に向って心をゆさぶるような声で話しかける。夢のもつ意味は物語の展開上重要なので，煩を厭わず引用する――「ベルよ，お前が思うほど実際に不幸だと信じこんではいけない。これまでよそで不当にも与えられなかった報いを，ここでお前は受けるだろう。私を変装させ隠している外観から真の私を見分けるよう，お前の洞察力を働かせておくれ。私をよく見て，私と一緒にいることが卑しむべきことか，お前にふさわしくない出身の相手より，もっと嫌われるべきかどうか判断しておくれ。望むがよい，お前の願いはすべてかなえられよう。私はお前を優しく愛している。お前だけが，お前自身の幸福を願うことによって私を幸福に出来る人なのだ。決して嘘をついてはいけない。お前は心映えにおいても，その美しさ同様他の女達よりずっとすぐれているのだから，私達は完全に幸福になれるだろう°」[7] ではどうすればよいのですかという Belle の問いに対し，感謝の気持ちだけに従って行くようにと彼は答え，眼で見たものに判断を頼らず，とりわけ私を見捨てないで，私の耐えているおそろしい苦しみから私を解放してほしいと頼むのである。それほど注意深くなくても，読者あるいは聞き手は，ここにすべての伏線が張られていることに気づき，話の結末まで容易に見通すことができるのだが，以後こうした夢の場面がくり返される。口下手な Bête の代弁者として，夢の中の王子が恋人役をつとめるのである。そして Belle は夜毎の夢と夢との間にこの謎めいた言葉の意味を自分に問い続ける。宮殿の数多い部屋を見物していた Belle は鏡の間で腕環をみつける。その腕環には夢の王子の美しい騎士姿の肖像が描かれていて，彼女は喜んでそれを身につける。また絵の飾ってある回廊には等身大の王子の肖像画もかけてあった。Belle だけは気づかないが，読者にはここが誰の宮殿なのか自然に納得できるように，ていねいに描写され，そしていつ Belle がそのことを発見するかという期待をつないで行く。ごく幼い読者は美しいお姫様と王子様のお話が大好きで，パターン通りに書かれていればそのパターンに安心してよりかかって楽しむことができるものだが(ごっこ遊びの時代)，年令が進むにつれ，人物の心の動きについても筋道立てて考えるヒントになるような説明が欲しいし，背景に関しても，細部まで想像力を刺戟してくれるような描写を喜ぶのではなかろうか。

9時の夕食時に Bête が現われる時と，夢の中で美しい見知らぬ青年 bel inccnnu に出会う以外，昼間の Belle は広い宮殿にたった1人で，次々にこの宮殿の魅力を発見する。例えば，庭におりてみると，そこは今まで見たこともないような美しい庭園で，木の茂みはすばらしい石像で縁どられ，数知れぬ噴水は絶えず水を噴き上げていて，一番高いものは視界に入りきらぬほどであった。ヴエルサイユの庭園を思わせるような，Belle をとりまくこうした背景(デコール)は，Boucher や Watteau の描く雰囲気である。驚いたことに，夢で見たのと同じ場所があって，とりわけオレンヂとミルタの木に縁どられた大きな水路を見たときは，夢の中のできごとを作りごととは考えられなくなるほどだった。この宮殿には人間こそ Belle 1人であったが，珍しい鳥の一杯はいった大鳥籠の置いてある回廊もあったし，別のところには有名な作家の詩句を暗誦したり，オペラの一節を歌ったりするおうむ達がいた。話し相手がなくて淋しかった Belle が特に気に入った1羽を選ぶと，他のおうむ達はやきもちをやいて悲しげに嘆きを訴えるので，いつでも好きな時に来てあげますと約束して，彼等をしずめねばならなかった。また猿の一団もいた。大ざる，小ざるに尾巻き猿，人間の顔をし

た猿もいれば，青ひげや緑のひげ，黒ひげや金黄色のひげをはやした猿などもいる大集団で，彼等はまるで宮廷人のような振舞い方で彼女を恭々しく歓迎し，軽やかに綱渡りなどしてみせるのであった。女官の服を着た2匹の大きな牝猿が Belle の侍女として仕えることになり，2匹の小猿が小姓として彼女の服の裾を持ち，おどけた尾なし猿が従者 seignor escudo となり，手袋をはめた手を差し出すのであった。これらの猿たちは Belle の食事を給仕し，別のグループは食後の余興に古典劇を演じたりするが，おうむの誦する科白にぴったりと身振りをつけて演じるのであった[8]。このように，人間の存在だけを除外して，およそ宮廷の生活に似つかわしい情景が次々と，非常に鮮かな映像を喚起して描かれていく。或る日 Belle は大広間に入る。そこは四方に窓がついているが，2つしか開いてなくて薄暗い。もっと明かりを入れようと彼女が開いたところ，そこは閉ざされた暗い空間だった。突然幕が引き上げられ，まばゆい光線がさして，劇場だということがわかる。座席には着飾った美しい男女が坐っている。舞台ではすばらしい古典劇が上演される。ふと隣の席に手をのばすと，ガラスの板で仕切られていて，彼女が現実に見たと思ったのはこのクリスタル・ガラスの反射を利用して遠くの映像を送る人工的な仕掛だったのである。別の日にはここでオペラが上演され，平土間には彼女の顔見知りが坐っているのさえみられた。もう一つの窓を開けるとそこにはサンジェルマンの市が現われた。そこを歩く人達の話は全部聞こえても，彼等には Belle の姿も見えず声も届かなかった。この部屋の窓は尽きぬ楽しみの源で，チュイルリーの庭園に面していてヨーロッパ中のよりすぐった貴族の男女の姿が見られる窓もあり，また最後に開いた窓は，現在の世の中で起っていることを確実に伝えるニュースの窓だった。最近の近衛兵の反乱の際など，ちょうど彼女はこの窓にいて，その一部始終を目撃したのであった。

以上，主としてボーモン夫人の話には出てこない場面を中心に，Belle のおかれた宮殿の様子を少し詳しく紹介してみた。M. E. Storer の研究[9] によれば，フランスの仙女物語の流行は 1698年をピークとして，1700年頃にはこの妖精流行の猛威 tyrannie des fées は衰えていたようであるが，こうした物語のもつ雰囲気からいってヴィルヌーヴ夫人は，年代的に40年のへだたりはあるものの，サロンで仙女物語が語られ人々が夢中になった時代に，「遅れて来た人」retardataire であり，ペローやオーノワ夫人等の仲間に入ると考えられるのではなかろうか。

話を夢の中の王子という人物設定に戻そう。Belle は一目見た時からこの王子を恋するようになり，一方では毎晩挨拶のように「結婚してくれますか[10]」と尋ねる Bête に対しても，その数々の優しい心づかいに感謝し，友情が深まっていくのを感じ板ばさみとなって，ついには宮殿の暮しが提供してくれる様々の気晴しも心から楽しめなくなるほど悩むのであるが，その Belle の悩みや動揺が筋の展開と共に振幅を増し，盛り上っていき，大詰めの結婚承諾に到達する。王子の存在は，Belle の Bête に対する感謝や友情の気持ちが愛に変化する過程に大きな障害となり，Belle に対する試錬となっているのである。

コクトーの映画はボーモン夫人の物語から想を得たといわれているが，王子と似た役割の青年，Avenant が登場する。彼は Belle の兄弟 Ludovic の友人で Belle に求婚している。Avenant と Ludovic が Bête をやっつけ，宝物を奪おうとして，宝物の置かれている Diane の像のある建物に入ろうとして天井のガラスを壊わした時，石像の Diane の手が動き，その弓に Avenant は背中を射ぬかれる。死んで行く Avenant の顔がだんだんゆがんで Bête に変身する。一方，死にかけていた Bête は Belle の愛のまなざしによって魔力から解放され王子の姿になるが，不思議と顔は Avenant に似ている。このように，彼女の恋人に変身するという点で，むしろヴィルヌーヴ夫人の作品との類似がみられるのである[11]。

2. 仙　女

仙女も筋の展開上重要な役割を果している。ボーモン夫人の場合は2回登場するだけだが，ヴィルヌーヴ夫人の物語では夢の中に4回と最後の場面とで合計5回登場し，Belle の Bête に対する感情が岐路に立たされる場合で指導の役割をつとめる。仙女は夢の中に現われ，王子の言葉の謎を繰り返し強調する。1回目は，Belle の行いを讃え，すばらしい運命が待っていますと予言した時で，そのためには外観にまどわされないように，と命じる。2回目は，この宮殿に王子が囚われていると疑った Belle がここに住むのは私達2人だけですかと Bête に尋ねた時である。Bête ははげしい口調でそうだと答えそっけなく立ち去る。想像の世界の中だけではなく，現実に恋する人に会う期待を抱いていた Belle は，この宮殿はいずれ自分の墓場となる牢獄なのだと悲しむ。その夜の夢で，Belle は Bête に対する気持ちをためされる。沈みこんでいる Belle に王子は，Bête に会うことがあなたをそれほど悲しませるなら，彼から解放してあげようといって短刀を抜いて無抵抗の Bête に斬りかかる。びっくりして必死に止める Belle に，それでは私のほうを愛しているのではないのですね，といいあくまで Bête を打とうとする。この時の Belle の返事がすぐれた愛の告白になっているので引用しておく。《…Vous me tenez lieu de tout, et je ne vous fais pas l'injustice de vous mettre en parallèle avec aucun de tous les bien du monde. Sans peine j'y renoncerais pour vous suivre dans les deserts les plus sauvages. Mais ces tendres sentiments ne peuvent rien sur ma reconnaissance. Je dois tout à la Bête, … c'est elle qui m'a procuré le bien de vous connaître …》[12] こうした争いのあと仙女が出現するのである。そして，愛情にまけて義務を犠牲にしてはいけない，人目を欺く外観をあてにしたりさえしなければ，お前は真の幸福への道を歩いているのだから，と念を押す。しかしこの言葉も Belle にとっては，謎を増幅する効果しかもたない。3回目は父の家に帰った Belle が約束の期限がきても戻らず，死にかけている Bête の夢を見た直後に現われる。この時は厳しい調子であと1日延ばしたら Bête は死ぬだろうといって Belle の帰りを促す。そして最後は結末であるが，ここで一種のどんでん返しが行われ，ボーモン夫人の「美女と野獣」には全然ない話がつけ加えられている。Belle が結婚を承諾してから，物語は更に20頁も続くのである。「あなたを夫とします」と約束した晩，Belle は Bête とベッドを共にするが，Bête は横になるとすぐいびきをかいてぐっすり眠りこんでしまう。そのあと夢に王子が現われてお礼を述べる。あなたは長い間苦しめられた牢獄から私を解放してくれた，あなたと Bête の結婚は，王をその臣下に，息子をその母に返し，彼の王国に命を与えるでしょう，という。Belle はそれを聞いて不満である。彼女の結婚に絶望するどころか，彼の眼は極度の喜びに輝いているではないか。その時仙女が現われて彼女もお礼をいう。そして太陽が昇る時，お前は自分の幸福についてもっと詳しく知ることになろう，という。事実，朝眼がさめると彼女は自分の見ているものが夢の続きではないかと驚き，喜ぶのである。彼女は横に眠っている「夢の恋人」に話しかけ，腕を引っぱってみるが相手は一向に眼をさまさない。そこではじめて，魔法 enchantement がかかっていることに気づき，定めの期限がくるまでそっとしておこうと思う。そしてやっと仙女の言葉が真実を語っていたことに思い当る。

3. 女　王

しばらくすると，4頭の白い鹿のひく車で2人の貴婦人が到着する。仙女と王子の母の女王である。仙女に Belle を紹介された女王は，はじめ王子を救ってくれた Belle に感謝し結婚の承諾を与えるが，Belle が一商人の娘とわかると強く反対する。眼を覚ました王子に向って仙女は，今からでも思い直す自由は許されるからと選択を迫る。意見をきかれた Belle は，私が結婚の約束をした

時は人間以下のものに許すつもりでおりましたから，今となっては王子様は自由です，と答え，王子様のような方の魔法を解くお手伝いが出来たのはこの上もない身の仕合せです，この上は父の許に帰らせてくださいと頼む。この時たまりかねた王子が口を聞き，仙女と女王の2人に Belle を遠ざけて今迄以上に自分を不幸にする位なら，もう一度 Bête に戻してほしいという。Belle が比類のない女性であること，2人が心から愛し合っていることがわかってもなお，女王は身分の誇りに打ちかつことができない。そこで仙女は真実を明かす。Belle は実は女王の姪なのであった。仙女の妹が女王の兄である幸福の島の王と結婚して生まれたのが Belle で，生まれた時から王子の相手に運命づけられていたのである。仙女の信頼に答えず，偏見にとらわれていた女王が詫びてやっと物語は幸福な結末となる。そして嫉妬深い姉たちも石像にはならず，Belle の宮廷でしかるべき地位を与えられ，幸わせに暮すことになる。女王は Belle と Bête の世にも不思議な愛の冒険物語を後世に伝えるべく，王国の文書館 archives に書き残したのであった。

女王の役割は王子のそれに比べれば勿論，仙女の役割と比べても甚だ小さく，いわばつけ足しのようなものである。それなのに何故女王が最後に登場しなければならなかったか。それについては次のような理由をあげることができよう。すなわち，これが大革命に先立つこと半世紀も前に書かれた作品であり，作者のヴィルヌーヴ夫人自身も貴族の出身であり，さまざまな点で大人の愉しみのために作られた物語であるため，王子にふさわしい生まれを設定するほうが合理的であり納得力があると考えられたのであろう。さらにはまた，これでもかという調子で結末を長引かせ，障害を配し，Belle に対する試錬を重ねることにより，いやが上にも彼女の人格の完璧さを印象づける効果を狙ったのであろう。それはまた，生まれによる貴族よりも徳によってより高貴な人間が存在すること，結婚は徳にもとづかねばならぬという作者の考えを強調するためでもあった。

表現法の違い

まずはっきりしているのは，ボーモン夫人の物語が子供を対象としている点である。周知の通り，ボーモン夫人は「賢明な教育者」であり，70才迄生きて70冊本を書いた精力的な女性であるが，「美女と野獣」は「子供の雑誌」と題する「賢明なる女家庭教師と優秀な生徒たちとの対話集」の中で，知識や道徳を導入するための教訓的寓話の一として挿入されているのである。この本の構成については《Magasin des Enfants》を底本として翻訳された鈴木豊氏の「美女と野獣」に解説があり，それによると全体は27日に分れ，それぞれの日に女教師（Melle Bonne）と子供たち（Lady Sensée 12才，Lady Spirituelle 12才，Lady Mary 5才，Lady Charlotte 7才，Miss Molly 7才，Lady Babiole 10才，Lady Tempête 13才）との対話が行なわれ，そのなかで歴史や地理や聖書物語が説明され，その日のテーマに合った「仙女物語」が注意深く選ばれている。今日では滑稽にみえる手法であるが，「児童文学案内」の Marc Soriano は，18世紀の中葉においては，彼女のこうした作品群は近づきやすさの点で卓越していたと記しているし，子供を相手にした対話体というのはかなり斬新なスタイルであった。

「美女と野獣」の教育的意図は今更繰り返すまでもなく，父親や姉や野獣に対する心のやさしさが Belle に最後の勝利をもたらし，彼女は羨むべき幸福で報われ，意地悪な姉たちは罰を受けるというように，善・悪をはっきり対立させ，徳を説くところにある。結婚道徳を説いている点で，那須辰造氏が指摘される如く[13]，フランス妖精物語によくみられる一種の結婚童話であるが，細部においては，教育家ボーモンが顔を出しているのがみられる。例えば「その商人は才気のある人だったので，子供の教育には何物も惜しまずあらゆる種類の先生につけました。」とか，「毎日舞踏会や

芝居や散歩に出歩いていた姉さんたちは，一日中良い本を読んで過している末娘を軽蔑していました。」などの説明である。しかし，幸いなことに，「美女と野獣」という話のもつ魅力はそうした教育的配慮に打ちかつだけの力強さを持っている。

ボーモン夫人の再話はグリムなどの場合と違い，逆にもとの話の枝葉を落とし，心理分析を削って簡素化しているが，これは勿論対象である子供たちを意識してのことであり，子供にとって毒だと彼女が判断した要素は注意深く切り捨てられているのである。その簡略化がみごとに成功しているのは，聖書の要約と交互に挿入されるというこの本の構成に起因するのではないかという評[14]もある。また，Paul Remy によれば，「子供の雑誌」の中の物語がダイジェスト的な形式をとっているのは，短いものが喜ばれた当時の流行にのったものであり，また，夫人の英国滞在（1745年～1762年）の時期からみて，ロンドンで「聖書と太陽」の看板をかかげて The Juvenile Library を発行しはじめた John Newberry を手本としたのではないかといっている[15]。

100頁ほどの話[16]を約1/4に縮めるのであるから，ずい分と思いきって削られているのであるが，原作にはない描写が加えられているところもある。結末で姉さんたちを石像にするところとか，鏡に病気の父親が映る場面の例などはテーマの設定や筋の運びの上で必然性をもつといえるが，筋には全然関係のない，末稍的なところに現われている例を一つあげよう。商人が Bête の宮殿に迷いこんで御馳走を食べるところで，「彼は空腹に耐えられず若鶏をとり上げふるえながら二口で食べました。」という描写がある。それまでものの名前が描写されることはなく，長い並木道は単に「木」の並んだ道であり，それ以上説明されることはない。それだけにこの個所は日常的リアリズムが目立って変になまなましい。Belle と Bête の会話で，「私は自分がただの Bête でしかないことがよくわかっている。」「自分に才気がないとわかっている人は愚かな者ではありません。本当の馬鹿は決してそれがわからないものです。」というふうに，やや理窟っぽいところがみられるものの，全体としては，《Il y avait une fois un marchand ……》という伝統的書き出しで始まるボーモン夫人のこのお話は，直接話法による会話も多く，簡潔な表現で幸福な結末へと導く典型的な昔話のスタイルをそなえている。

ヴィルヌーヴ夫人の「美女と野獣」は，《Contes marins ou la Jeune Américaine》（航海用の物語または若いアメリカの娘）（1740～1741）と題する本に入っていて，18世紀には数回版を重ねたという。今回は初版と同じ体裁のテキストをみることが出来ず，《Cabinet des fées》にもとづくテキストによったので，〈La Belle et la Bête〉の部分しかなくて，タイトルの意味がはっきりしなかったのだが，たまたま脱稿間近になって前記 Paul Remy の論文を見る機会を得た。（因みに，この論文はフランスの比較文学者 Fernand Baldensperger の指導によって書かれたらしい。）それによるとこの作品は5部から成り，友情によって結ばれた2人の友人のうち1人がアメリカに渡り成功する。2人は子供を交換旅行させることになり，アメリカ生まれの娘がヨーロッパへ渡る。やがて青年が婚約者と定められた娘をアメリカへ連れ帰るために出発する。その帰りの長い航海の憂さ晴らしに侍女として同行する女性が毎日1時間，若い娘にふさわしい物語を読み聞かせるという趣向で，まず〈La Belle et la Bête》から読みはじめるという導入部がついている。P. Remy はヴィルヌーヴ夫人の作品に手厳しく，長過ぎてしばしば横道にそれ，まるで船の進行のようにゆっくりとしか進まない，と評し，この conte-roman（小説風コント）の調子は嫁入り前のひまな娘を感動させたり気晴らしさせるのに適わしいときめつけ，この物語に節度と魅力ある形を与えたボーモン夫人のおかげで「美女と野獣」は今日まで生き残っているのだといっている。そして内容はほとんど同じだとし，最初の部分（商人が Bête に出会うまで）のみの比較にとどめて

いるが，むしろ最初の部分は大きな違いのないところで，本稿でもとり上げていない。P. Remy がボーモン夫人の作品の本質的特徴としてあげているのは，1°）より単純，より具体的，より日常的現実に近い，2°）より明白に道徳的，3°）より簡潔，の3点である。2°）と3°）はその通りであるが，1°）のより具体的描写となると果してその通りであろうか。例えば Bête の描写を比べてみると，「その瞬間，大きな音がひびいて，とてもおそろしい野獣が彼のほうにやって来たので，彼は今にも気を失いそうになりました。」（Mme de B.）／「ものすごい音がして彼はふり返りました。自分の横におそろしい野獣がいるのに気づいて彼は激しい恐怖におそわれました。怒りに燃えた野獣は象のような鼻を彼の首に押しつけているのです。」（Mme de V.）。Belle がはじめて会う場面では，「2人が夜食を終えるとすぐ大きな音がひびいてきました。商人は野獣が来るのだと思い，泣きながら哀れな娘に別れを告げました。」（Mme de B.）／「怪物の足音が聞こえました。重い身体をひきずるおそろしい響，甲らのきしみ合うものすごい音，ぞっとするような唸り声が彼の到着を知らせました。」（Mme de B.）とあって，具体的な細部描写という点ではヴィルヌーヴ夫人のほうがより詳しい。ただし「メルヘンの世界」のなかで相沢博氏がヒロインの美しさの描写は総括的な表現で十分なのであって，「国中でいちばん美しい」というだけで聞き手の脳裡に完璧な美女のイメージが浮びあがるという意味のことを書いておられるとおり[17]，童話の本質という観点からみれば，「おそろしい野獣」と書くだけで十分であり，そのほうがかえって強い迫力を持つのであろう。

ところで，métamorphose というテーマを中心に《Cabinet des fées》のなかからいくつかの仙女物語を選んで編纂した André Bay は前書きで，フランスの仙女物語の特徴について述べているが，「愉しみを引き延ばすこと――よい障害がよい物語（コント）に仕立てるのであり，恋人達の最後の勝利に同意するには長い引き延ばしが必要なのだ。」といって，ヴィルヌーヴ夫人の「美女と野獣」を18世紀フランスの代表的コント conte des contes du XVIIIe siècle と評価している。その引き延ばしは次のように巧みに行われている。商人は，美しい城に通じる，そこだけは雪の積っていない並木道に足を踏み入れる。並木は花と実をつけた非常に丈の高い4列のオレンジの木で作られ，そこには秩序もシムメトリーもなしに立像が置かれてあった。あるものは道に，あるものは木々の間にあって，すべて未知の材料でできており，人間と同じ背丈，同じ色合いをもち，さまざまなポーズをしていて服装もまちまちであるが，その大部分は兵士をあらわしていた。―フランス風の幾何学的庭園にあって，秩序もシムメトリーもなしに並べられた立像はおかしいので，これは魔法がかかっているのではないかと思わせ，métamorphose を暗示して一種の伏線となっている。こういう描写をみると，「退屈で長ったらしいおしゃべり」という P. Remy の評は適当でないように思う。紙面の都合で他の例はあげられないが，ボーモン夫人の作品がより童話的簡潔さにおいてすぐれているのは事実としても，ヴィルヌーヴ夫人の作品がそれに素材を提供したことによってのみ価値を認められるというが如き批評はあまりにも不当であろう。

註

1) Paul Hazard : Les Livres, les Enfants et les Hommes, Boivin et Cie, 1949, p. 25.
2) Mme Leprince de Beaumont (1711～1780) La Belle et la Bête は《Le Magasin des Enfants》(1757) の第5話の第5日目に入っている。1785～1786 に全41巻より成る，妖精物語の集大成ともいうべき《Cabinet des fées》が出版された。今回テキストとして用いたのはこの版にもとづく，André Bay : 《La Belle et la Bête et autres contes du Cabinet des fées》, Club des Librairies de France, 1965。
3) 矢口達訳「美しい乙女（むすめ）と怪しい獣（けもの）」，家庭読物刊行会編，世界童話集第3篇「軽い王女」の中に収録。

大正10年4月。ヴィルヌーヴ夫人作としているが内容はボーモン夫人の作品である。
長松英一訳「ベルと魔物」，改造文庫第2部第105篇，仏蘭西家庭童話集第1巻，昭和5年4月。
小林正訳 「美女と野獣」，穂高書房，昭和23年，底本については記されていないが，前記長松訳同様，Hazard 前提書に引用の部分（註2）その他を照合すると今回使用のテキストと同じものと推定される。「美女と野獣」だけを収めた単行本である点が他の翻訳書と異る。
鈴木豊訳「美女と野獣」，角川文庫，昭和46年，底本は Le Magasin des Enfants, nouvelle édition revue par Ortaire Fournier, Paris, J. Vermot Editeur. 1975年に駿河台出版社より教科書版が出ており，原文をみることができるが，照合の結果，（註2）の版と異同が大きく，かなり省略されている部分がある。P. Hazard 前掲書に引用されている部分は前記 A. Bay 版と同じである。

4) Mme de Villeneuve (Gabrielle-Suzanne Barbot de) (v. 1695～1755) ラ・ロシェルの貴族の娘として生まれ，陸軍中佐の J.-B. de Gaillon de Villeneuve に嫁すがやがて未亡人となる。パリに落ち着き文筆で暮しを立てようと志し，父 Crébillon に認められ，励まされる。代表作は《La Jardinière de Vincennes》(1750～1753)《La Belle et la Bête》は《Les Contes marins ou la Jeune Américaine》(Paris, 1740～1743) に収録。

5) Paul Delarue : Le conte populaire français, catalogue raisonné des versions de France et des pays de langue française, tome 1 1957 Erasme 未見。 A. Bay の解説による。p. 12.

6) Ardré Bay 前掲書。p. 355.

7) Op. cit. p. 57 et suiv.

8) 並木道の立像と同様，魔法で姿を変えた宮廷人のような印象を与えるが，彼等の変身については語られない。イギリスにおける「妖精物語」の導入の歴史を明かにするため，代表的な24篇について初版またはそれはそれに近い初期のテキストを収録し解説した Opie 夫妻の，"The Classic Fairy Tales" Oxford University Press. 1974 には様々な時代の挿絵が合計243枚入っているが，"Beauty and the Beast"（ボーモン夫人作）の挿絵のうち "Water Crane's Toy Books Shilling Series, London & New York : George Routeledge and Sons (1874) 版からとったものには，小姓姿をした2匹の猿が描かれている。瀕死の Bête をみつけた Belle が水をすくってかける，その手伝いをした猿たちである。A. Bay 前掲書 p. 100。なお，Andrew Lang の The Blue Fairy Book に収録の話はヴィルヌーヴ夫人作を要約したもので，おうむの挿絵や後述の象のような鼻をした野獣の挿絵が入っている。

9) Mary Elizabeth Storer : La mode des contes de fées (1685～1700) —Un épisode littéraire de la fin du XVIIe siècle, Paris Champion, 1928.

10) 《Voulez-vous être ma femme ?》(Mme de B.)《Voulez-vous que je couche avec vous ?》(Mme de V.)

11) Jean Cocteau : La Belle et la Bête, édition du Rocher, 1958. このテキストも A. Bay 前掲書に収録のものによった。このほか，Belle を連れ戻しに行く Magnifique（馬の名）が登場するが，商人の乗って来たのとは別の，魔力を備えた馬の登場するヴィルーヴ夫人の物語との類似点である。

12) 前掲書 p. 78.

13) 那須辰造「フランス文学にあらわれた児童観」「青少年問題」1967年3月，14巻3号。

14) Dictionnaire des lettres françaises, Librairie Arthème Fayard 1960, Leprince de Beaumont の項。

15) Paul Remy : Une version méconnne de la Belle et la Bête, La Revue belge de philologie et d'histoire, 1957. tome 1.

16) A. Bay 前掲書の場合。《Contes marins ……》の表題をもつ原話は，P. Remy 使用のテキスト（前掲論文 p. 4）によると中心部分 170 頁，全部で約 300 頁とあり，Opie 夫妻前掲書では 362 頁となっている。

17) 相沢博「メルヘンの世界」講談社，昭和43年，p. 29.